大学の授業における私語の経験頻度と迷惑の認知

騒音感受性と友人との付き合い方からの検討

○宮原道子

(立命館大学文学部)

キーワード：私語 騒音感受性

Perception and frequency of whispering during university lectures: focusing on noise sensitivity and friendship.

Michiko MIYAHARA

(Faculty of Letters, Ritsumeikan University)

Key Words: whispering, noise sensitivity

目 的

授業中の私語は社会的迷惑行為だと考えられるが、友人関係を調整し、維持する機能という側面ももつ(出口・吉田, 2005)。本研究では、授業中の私語の経験頻度と迷惑認知について、騒音感受性と友人とのつきあい方の観点から検討した。仮説1)騒音感受性が高い人ほど騒音に敏感なため私語の経験頻度および迷惑認知が高い 仮説2)私語の話者が友人の場合と、私語の内容が授業に関連した話題の場合には、騒音感受性が高い人の方が話者や話題に配慮するために(宮原, 2007)、経験頻度と迷惑認知は低くなる 仮説3)騒音感受性の高低によって友人とのつきあい方が異なり、その違いが私語の経験頻度や迷惑認知に反映される

方 法

参加者 関西の2大学の大学生男女454名(男性207名, 女性247名, 平均年齢19.4歳)であった。

質問紙 1)騒音感受性尺度(岩田, 1981)21項目を用いた。騒音の感じ方を5件法で回答した。得点が高いほど騒音感受性が高いことを表す。2)私語の頻度と迷惑認知を問う項目 出口・吉田(2005)の授業中の私語の内容に関する8項目を用いた。各項目に対して、話者が自分の友人同士の場合と、未知の他者の場合の2場面について、それぞれ経験頻度と迷惑認知を5件法で回答した。3)友人とのつきあい方尺度(落合・佐藤, 1996)35項目を用いた。5件法で回答した。

手続き 二つの大学でそれぞれ授業を利用して実施した。

結 果 と 考 察

主因子法による因子分析から、騒音感受性尺度は騒音感受性の1因子が得られ、評定値の合計得点を騒音感受性得点とした。私語の話題は経験頻度と迷惑認知ともに話者別に分析した結果、すべての分析で授業に関連(4項目)/無関連の2因子が得られたため、各評定値の合計点を話者(友人/他者)と話題(授業に関連/無関連)別の私語の経験頻度と迷惑認知の尺度得点とした。友人とのつきあい方尺度では、全方向

的、防衛的、自己主張、自己自信の4因子が得られた。各因子の項目数が異なるため、各因子項目に対する評定値の平均点を下位尺度得点とした。以上の9つの尺度得点を観測変数として、私語の経験頻度と迷惑認知についてそれぞれ共分散構造分析を行った。私語の経験頻度ではFig.1 (GFI=.992, AGFI=.982, RMSEA=.000), 私語の迷惑認知ではFig.2 (GFI=.995, AGFI=.986, RMSEA=.000)の結果が得られた。なお、図中のパス係数はすべて5%水準で有意である。

私語の経験頻度については仮説1, 2, 3それぞれの一部が支持された。一方、私語の迷惑認知については、仮説1, 2, 3のすべてが支持された(Fig. 2)。従って、授業中の私語の経験頻度と迷惑認知に対して、騒音感受性の影響は異なるものであった。このような結果が得られた理由として、騒音感受性が高い人が示す他者への感受性の高さ(宮原, 2007)は、社会的迷惑を強く感じる共感性や視点取得能力の高さ(石田ら, 2000)と共通するものであることが考えられる。

引用文献

- 出口拓彦・吉田俊和(2005). 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連——大学生活の適応という観点からの検討—— 社会心理学研究, **21**, 160-169.
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森 久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛(2000). 社会的迷惑に関する研究(2)——迷惑認知の根拠に関する分析—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **47**, 25-33.
- 岩田 紀(1981). 騒音感受性と性及び音響関連反応の関係 徳島大学学芸紀要 教育科学, **30**, 41-45.
- 宮原道子(2007). 外界からの刺激に対する感受性の研究——騒音, 他者, 環境への感受性と一般的感受性の関係—— 応用心理学研究, **32**, 82-91.
- 落合良行・佐藤有耕(1996). 青年期における友達とのつきあいの発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.

Fig. 1 私語の経験頻度のモデル

Fig. 2 私語の経験頻度のモデル